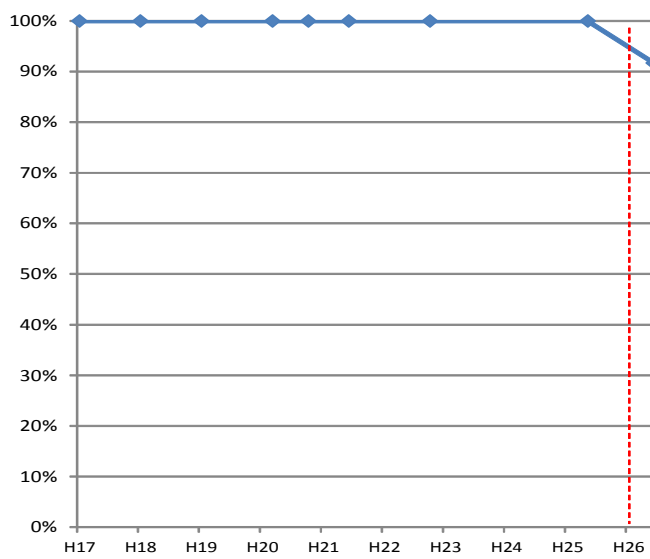


樹種名	ハルニレ	
科 目	ニレ科	
学 名	<i>Ulmus davidiana</i> var. <i>japonica</i>	
分 布	北海道・本州の山地に自生する。	
樹木特性	陽樹で川沿いや氾濫原、扇状堆積地や山地の溪谷沿いの凹型斜面や谷斜面下端などの湿潤地に生育し、湿潤で肥沃な地を好み、平原や、氾濫原に林を作る。	
用 途	街路樹、公園樹、建築・器具・楽器・薪炭材として利用。	
植栽本数 (植栽密度)	12 本 (他樹種との混植)	
特 徴	【樹 形】 落葉高木で北国の山地で、ニレの名で普通に見ることのできる樹であり、新緑が美しい。街路樹などでよく植栽される。樹高 35m に達する。樹皮は灰褐色で、縦にやや深く、不規則な裂け目ができる。材は堅くて重い葉は、互生し、葉身は広倒卵形あるいは倒卵状楕円形。基部はくさび形で、左右不同。表面はざらつき、微毛がある。縁には二重鋸歯がある。アキニレの葉は、少し小さく鈍鋸歯縁。 ハルニレの花は、葉の展開に先立って枝先に咲く。果実は 5 月には稔り、翼があるので、翼果と呼ばれる。両面無毛で長さ 5~6mm で先端はくぼむ。樹皮は不規則に縦に割れる。3 月から 4 月頃、葉に先だって前年枝に帯紫淡緑色の小両性花を 7~15 個束生する。 路樹や公園樹に利用されるが、アキニレに比較すると大気汚染に弱い。材は器具・楽器・薪炭などに利用され、枝の繊維からは縄を作る。	
試験地での様子	普通苗を植栽、植栽直後コウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害が見られたが、枯死には至らず成長は良好である。植栽から 9 年が経過し、平均樹高も 5m 程度まで成長している。	
被 害	コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生している。	

ハルニレ 現存率



【現存率】

コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生したものの枯死には至らなかった。

さらに植栽木同士の被圧が見られたため、平成21年度に本数調整伐（1本）を実施した。

本数調整伐を実施した以外の調査木の現存率は100%（H25.6時点）である。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、現存率は91.7%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

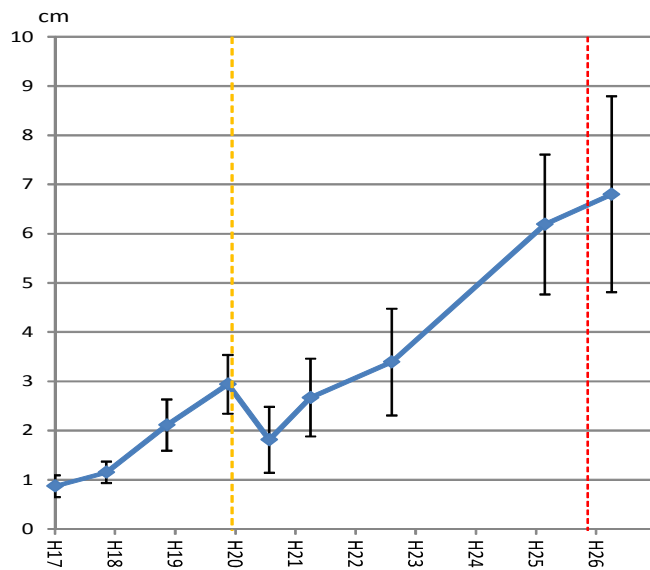
順調に成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は6.80cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ハルニレ 根元・胸高直径



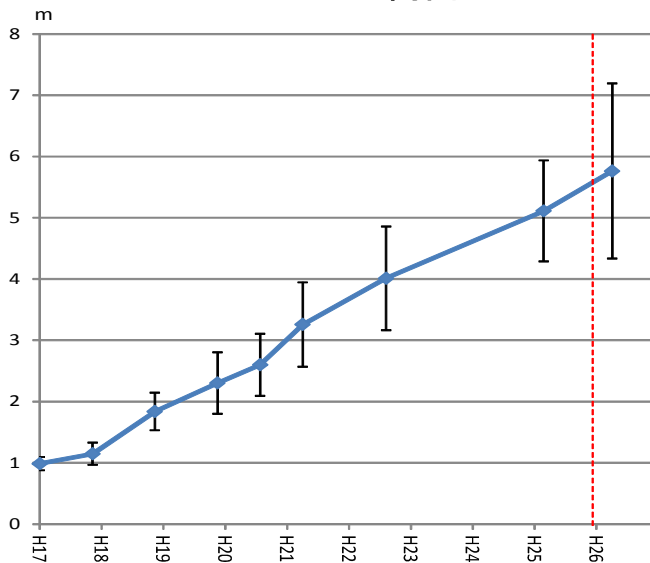
【樹 高】

順調に成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は5.76mであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ハルニレ 樹高



《プチ情報》

ハルニレは、春に早く花が咲くので「春榆」と名が付いた。ちなみにニレは「滑れ（ヌレ）」の意で、皮を剥がすとヌルヌルするからだといわれている。

仲間のアキニレに対し、春に花が咲き、実ができることからハルニレとされている。